



支笏湖 湖水と温泉と旅館の話

巖谷 國士 Iwaya Kunio

1943年東京生まれ。東京大学出身。仏文学者・評論家・作家・写真家・明治学院大学名誉教授。シュルレアリスムの研究と実践を軸に、芸術・文化の広い領域にわたって執筆活動を展開。講演や展覧会監修、内外の紀行でも知られ、北海道との縁も深い。著書に『シュルレアリスムとは何か』『日本の不思議な宿』ほか多数、近著に『澁澤龍彦論コレクション』全5巻。

北海道には湖が多いけれど、なかでひとつを選べといわれれば、すこし考えてから支笏湖と答える。道東ではオホーツクのサロマ湖・ノトロ湖や^{とうふつ}濤沸湖のような潟湖、内陸の摩周湖・屈斜路湖や阿寒湖もいいし、道央・道南なら洞爺湖やウトナイ湖や大沼など、それぞれ独特の風景の断片が記憶にあるが、湖水全体の景観、とくに水面のひろがりの美しさという点では、支笏湖に並ぶものはないだろうと思える。

もう半世紀ほど前のことだが、西北の湖畔にあるオコタン温泉に滞在したことがあった。人里はなれてはいても立派な建物で、その名もグランドホテルというのだが、湖畔の庭に出て、霧にかすむ風景と、冷たく乾いた空気に浸されたときの気分は忘れられない。なんともいえぬ快い寂寥感があった。

あのときはたしか連絡船で行った。まだ車の通れる道がなかったのだろう。夏だったと思うが霧が出て、船から見た湖面の^{さざなみ}小波と、湖畔にほんやり浮ぶ樹木のシルエットだけが、モノクロームの濃淡のイメージとして残っている。

じつは一昨年末、連載中の漫画『プリニウス』でも知られるあのヤマザキマリさんが、共作者のとり・みきさんとわが家にはじめて見えて、長いあいだ話しこんだことがあったのだが、そのとき、『テルマエ・ロマエ』でもわかるとおり温泉好きのマリさんから当然のように話が出て、あちこちの名湯を数えあげるうち

に、私は「支笏湖のオコタン温泉にまた行きたい」と洩らしたのだった。

マリさんは東京の生まれだが千歳で育った人だし、いまでも実家は千歳なので、市内にふくまれる支笏湖は身近らしい。ただオコタン温泉はすでになく、グランドホテルも廃館になったとのことで一抹の寂しさを味わったが、そのかわり、湖畔でもすこし手前にある丸駒温泉がいいからぜひ行くように、と勧められた。

なんでも旅館の常務さんがマリさんの旧友だということで、実家に戻れば札幌交響楽団の名ヴィオラ奏者だったご母堂（いまは「ヴィオラ母さん」としても知られる）とつれだって出かけ、逗留することもしばしばだという。

私がヤマザキマリさんと知りあったのはツイッターがきっかけだった。たしか『プリニウス』を私がツイートで絶賛したところ、とりさん経由でマリさんからリプライが入り、おたがいに以前からの読者であることがわかったため、いつか会おう、対談でもしようかという話になった。初来訪がじつは初対面で、しかも8時間ぶっとおしで喋りつづけたものだが、その後は会っていないし、対談もまだ実現していない。そんなわけで、昨年の初夏に支笏湖行きの予定が立ったとき、宿への紹介など頼んでよいかどうか、ややためらいをおぼえていた。

ところがメールで予定を洩らすと話はスムーズに進

丸駒温泉旅館のロビーにあったヤマザキマリさんによる色紙。上は『テルマエ・ロマエ』（ローマの浴場の意）の主人公ルシウス、下はおそらく作者自身の戯画で、宛書とサイン入り。下に2016年7月22日の日付がある。 撮影：筆者



み、マリさん自身が予約してくれたので、私は懐かしい支笏湖へ、40数年ぶりに、勇躍ひとり旅をすることになったのである。

ヤマザキマリさんの紹介で湖畔の宿へ

新千歳空港からは、支笏湖畔行きのバスに乗った。千歳市街で千歳川の橋をわたるとき、ヤマザキマリ初期の名作『ルミとマヤとその周辺』が思いうかんだ。母・妹と3人でくらしした千歳での幼時体験をもとにしているこの漫画には、千歳川で遊んで自然になじみ、社会とも出会う少女の日常が優しく描かれている。

千歳川は石狩川の支流のひとつだが、水源がじつは支笏湖であることを思いだす。マリさんはのちに十代でひとりヨーロッパへ渡り、イタリアから世界をめぐって稀に見る人生の旅人になってゆくのだが、幼時体験の源にもあの支笏湖の水があったのではないかと想像してみたくなる。

小一時間ほどで終点に着くと、宿の車が迎えにきていて、そこから湖畔道路に入った。雨になったけれど、雨の支笏湖もまた佳いということを知っている。岸に波がひたひたと寄せ、遠い湖面は途中から霧に消える。面積が全国8位で周囲40キロにおよび、しかも田沢湖につぐ深さと、摩周湖にならぶ透明度をもつこのカルデラ湖では、波の立ち方や寄せ方にも独特の淡々としたリズムがある。

20分ほどで丸駒温泉旅館に着く。鉄筋三階のホテル式の建築で、ロビーは吹抜になっている。フロントで名のると常務に連絡してくれた。奥の壁に「創業104年」とあり、左のボードにはイベント案内などのほかに、ヤマザキマリさんの色紙が2枚とめてある。

上は『テルマエ・ロマエ』のルシウスが湯あがりにコーヒー牛乳(?)を飲んで動揺(?)している図、下は作者が思案顔(?)で露天風呂に入っている図である。それを眺めていると常務氏があらわれた。ルシウスなみの長身の偉丈夫である。

「マリさんとは中学の同級生でした。千歳市街の学校で、僕はここからスクールバスでかよっていたんです。」

「彼女はどんなでしたか？」

「変り者でしたね。まったく同調・忖度しませんか

ら。いつも動物の絵を描いていて、熊とか、象とか。上手でした。」

「いまと変わらないようですね。」

「すでにあの野太い声でしたよ。」

「野太い……。想像したとおりです。すでに温泉好き？」

「だったと思います。日帰りで来たこともある。最近でも、帰国したときにはお母さんといっしょに。近いですしね。」

支笏湖は千歳市のなかにあるが、アイヌ語のシコッペツ（大きな・くぼみ・川）から来たシコツのほうが古い地名で、ただ江戸後期には「死骨」にも通じるその名が不吉だということから、千歳という地名をつけたらしい。そこに鶴が多かったので、「鶴は千年」にちなんで「千歳」にしたという。

それから三階の立派な部屋に通された。七畳半の和室の手前に洋室もあり、ソファとテーブルのほかに、なんと電動式のマッサージ椅子まで置かれている。カーテンをひらくと窓の全面に支笏湖があらわれた。

窓の端がドアになっていてベランダに出られる。雨はやみ、風もないが肌寒い。そこにも椅子と丸テーブルがあって一服できる。湖面は灰色一色で、遠い対岸の白い霧の帯まで見わたせる。その上に紋別岳やモーラップや風不死岳^{ふうふしだけ}の山影がうっすら浮かぶ。眼下の広い庭に散歩道が見える。まずそこを歩いてみよう。

ロビー奥から外へ出ると、芝地の斜面がゆるやかに降りてゆく。ふりむくと建物が見わたされた。横一直



支笏湖に向ってひろがる丸駒温泉旅館の建物と庭園。手前に真っ赤なバラが咲いていた。 撮影：筆者



支笏湖につきだした旅館の棧橋と船。かつては湖畔に道路がなく、船で客を迎えていた。小雨の降る午後、対岸が霧にかすんで見える。 撮影：筆者

小さな鄙^{ひな}びた社のなか^{やしろ}に、おだやかな顔つきで立っている地蔵尊には心ひかれた。アルプス風にも見えるこの大旅館が、大正4年（1915年）にひらかれた湯治場に起源をもつという事実も興味ぶかい。調べてみたが、それより温泉に入るのが先決だろう。そう思ってまた部屋へもどっていった。

温泉浴場で支笏湖を思う

大浴場はさほど混んでいない。朦^{もう}々たる湯気のなか^{もう}に三つの浴槽がならぶ。左から低温、中温、高温と記した札があるので、その順に試してから、好みの高温の湯船に身をゆだねる。う～ん、いい気持ちだ。

やや濁った湯で、密度が高いせいか、体がすこし浮く。肌にじわっとしみこんでくるようだ。塩化物泉で海水の成分に似た食塩を多くふくんでいるが、こういう泉質は体の芯まで効く。脊柱に持病のある高齢者にはこたえられない。内臓疾患など適応症の幅が広く、子宝の湯でもあるのだろう。

熱い湯にしばらく浮きながら、唸^{うな}ったり息をつめたりしていると、窓外にひろがる湖の水との対照が思いうかんだ。支笏湖は4万4000年前の大噴火でできたカルデラ湖で、周囲のあちこちに温泉が湧いているが、本体の水はあくまでも透明で冷たく深い。「死骨」が沈んでいるとか、大ウミヘビが棲むとかいう伝説は眉唾^{まゆつば}だとしても、底の知れない神秘性もそなえている。

そういえば漢字表記の「支笏」にも、どこことなく神秘と魔性を感じられる。かつて「志古津」などの表記もあったが、同じ当て字でも「支笏」のほうが似あう。「笏（こつ／しゃく）」は昔の束帶^{そくたい}で右手にもつ細長い薄板を指すが、もとは古代の中国やペルシアで使われた宗教的な道具であり、ケルトの神官の笏杖^{しゃくじょう}にも通じていそう。そんな類推まで誘う妖しい当て字である。

そこから外へ出ると展望露天風呂があり、霧のために展望はなかったがここもいい湯だ。ほかにも天然露天風呂や貸切浴場もあるらしいが、寒くなってきたのでそれらは明朝、ということにして部屋にもどる。

すでに夕食の用意ができていた。献立は盛りだくさんで、大型の温泉旅館らしく定番の御馳走がそろい、

線に長く伸びる堂々とした造りで、白壁に青を配し、同形の窓が等間隔に並んでいるところはアルプス風というか、一見して日本の温泉旅館とは思えない。

湖畔を左へ歩くと船着場がある。洋式の街灯の立つ棧橋に横づけされた白い孤独な船が美しい。浅い水面は底まで透けて見える。熔岩のちらばる岸辺に静かな波が寄せている。

棧橋のそばに花壇があり、エーデルワイスの白いかわいい花が咲いていた。歌にあるとおりアルプスやティロルに多い高山植物だが、和名はミヤマウスユキソウ（御山薄雪草）で、北海道でもたまに見る花だ。これが旅館の「ホスピタリティフラワー」だという。

さらにすこし登ると正面に、湖に面した火山岩の崖が見わたされる。手前では鉄管の先から温泉がほとばしりでている。その流れと湖の波の会うところに渦ができる。広大な湖面の片隅でおこっている小さなドラマのようなその渦巻に、しばらく見入ってからまた宿のほうへ歩いた。

帰り道の斜面に古い木造の小屋があるので覗いてみると、なかにはなんと子宝地蔵がいる。立札にはこうあった。

「当館初代佐々木初五郎が大正四年にこの地入植後湯治場を開いたところこの湯に浸かった多くの女性が子供を授かったことから、この地蔵尊を祀っております」

和牛の陶板焼と茹で毛蟹を中心にしているが、やはり土地のものがよく、支笏湖特産のチップ（姫鱒）の姿焼、そしてとくに刺身が旨い。行者ニンニクの醤油漬やハヤの塩辛も珍味である。

食後はソファでくつろいでいたが、入口で手わたされた『丸駒百年』という冊子をふとひらいてみると、これがおもしろい。旅館の沿革を紹介するパンフレットとしてじつに出色のものだった。

老舗の数奇な物語

宿の初代主人・佐々木初太郎は福島県上岡村（現・富岡町）の出身で、1910年に王子製紙千歳川発電所の建設に加わったが、神経痛を病み、恵庭岳の麓に温泉が出ているとの噂を聞いて、まだ未開の地だった湖畔の調査に出かけたという。原生林を抜けて源泉と出会い、15年にまず草ぶき小屋を建ててから、すこしずつ湯宿の体裁を整えた。人柄のよさで人気も出て、湯治や釣・登山の客が集まってきた。

初太郎が1947年に74歳で亡くなると、二代目を継いだ姪のヨシエは戦後の厳しい時期を切りぬけ、近代的な温泉旅館の基礎を築いたのち、83年に75歳で死去。三代目となった甥の金次郎が2年後に全面改装を施し、それが「新時代の幕開け」になったという。

以下、現・三代目の「回顧録」として語られる物語は興味ぶかく、一気に読み通した。百年史を要約することはできないが、全16章の題名を記すだけでも、波瀾万丈の内容を想像できるだろう。

「秘湯」「創業」「跡継ぎ」「自然が友」「別離」「双葉高」「人恋しさ」「親の計略」「念願」「愛児の死」「3代目」「賓客」「外国人従業員」「翠明閣」「3・11」「母の教え」。

よくある商売繁盛記などではない。自分と家族との数奇な運命をふりかえり、自然環境や時代と社会の変化への視野も失わずに淡々と語りなした、これはひとつの「年代記」である。

ポイントをひとつ挙げると、家族の故郷・福島県富岡町にかかわる記述がある。ヨシエは初太郎の姪だが、金次郎もヨシエの甥で、富岡から迎えられた養子（子宝地藏を思う）だった。中学・高校時代は富岡の実家で暮らし、やがて支笏湖へもどって宿を受けつい

でいるので、故郷が二つあることになる。

「3・11」という章はその事実にかかわる。2011年のあの日、丸駒温泉で地震を察知した金次郎はすぐに実家の人々を思いやった。富岡は東京電力第1原発からわずか9キロの距離なのだ。丸駒温泉旅館はこの危機に、家族の被災者9人を迎え入れている。さらに近隣に避難してきた被災者を見舞ったり、義援金を呼びかけたりしている。

「私には支笏湖と福島二つの古里があります。その一つが手の届かないところに行ってしまいました。[……] 私の3・11もまだまだ続きます。」

このような文章を旅館で読めるとは思わなかった。個人的な事情といっても普遍性がある。私たちにとっても3・11はまだまだつづいているし、それ以前・それ以後の天災も人災も、現在のコロナウィルスによるパンデミックも、それと無縁の出来事ではないからである。

ともあれこんな場にこんな文章を載せる見識とセンスは立派だ。旅館といえばマーケティング面ばかり追い求めがちな現在だから、なおさらのことである。

翌朝はまた温泉に入り、庭と周辺を散策した。湖の眺めはかわらず灰色の濃淡だけだが、私にはそのほうが支笏湖らしく思えた。

帰りは千歳駅で降り、ヤマザキマリさんの千歳川を間近に見ようと思っていたのだが、雨が強くなったのであきらめた。今年3月に札幌で講演をすることになり、そのあと千歳へ行く予定を立てもしたが、それもコロナ禍のために中止になってしまった。

はじめは支笏湖と千歳をつなげて書く気でいた。だがそれについては、いずれ彼女との対談で語ればよいだろうと思っている。



支笏湖の眺望、小雨のなか。向いの山は紋別岳だろう。撮影：筆者